

佐々木道誉の足跡と 平清盛御落胤伝説を訪ねて

—甲良から多賀へ—



探訪されるみなさまへ

- ここに掲載している情報は、平成24年夏現在のものです。探訪される際には、公開の有無・休館日・料金などあらためてご確認ください。
- ゴミは各自で持ち帰る、騒がないなどマナーを守ってください。

埋蔵文化財活用ブックレット 4

佐々木道誉の足跡と 平清盛御落胤伝説を訪ねて - 甲良から多賀へ -

刊行：平成24年10月日
編集：滋賀県教育委員会
制作・刊行：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
住所：〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号
電話：077(528)4674 FAX:077(528)4956
e-mail: ma07@pref.shiga.lg.jp
印刷：●●印刷株式会社



はじめに - 佐々木道誉の足跡と平

清盛御落胤伝説を訪ねて -

佐々木（京極）道誉は南北朝内乱期に足利尊氏を助けて室町幕府の創立に貢献し、室町時代に京極氏が発展する礎をつくりました。この道誉が本拠を置いたのが甲良町正楽寺です。山上に城郭を築き、山麓には菩提寺となる勝楽寺を建立しました。勝楽寺には道誉の墓と伝えられる宝篋印塔があり、道誉の筆になるとされる寺号の扁額も伝わっています。

また、平安末期に位人臣を極めた平清盛にまつわる伝説が多賀町の胡宮神社に伝わっています。清盛の父は、北面の武士として白河院に仕えた平忠盛です。しかし、本当の父親は忠盛ではなく白河院であることを記した古文書が神社に伝わっているのです。そして胡宮神社が建つ場所には、中世に繁栄を誇った巨大寺院敏満寺が建っていました。寺は織田信長によって滅ばされてしまいましたが、胡宮神社周辺に広がる敏満寺遺跡からは、当時の敏満寺の威容を示す遺構が多く発見されています。

この探訪では、甲良から多賀にかけて広がるこうした先人たちの足跡を訪ねます。そしてその歴史の豊かさを感じていただきたいと思います。



勝楽寺扁額

目次

はじめに 佐々木道誉の足跡と平清盛御落胤伝説を訪ねて

～甲良から多賀へ～・・・・・・・・・・・・・ 1

目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

勝楽寺と佐々木道誉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

若一神社・榑崎古墳群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

水沼荘と大門池・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

敏満寺遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

胡宮神社と平清盛御落胤伝説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

多賀大社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

村山たか・真如寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

【凡 例】

○ 寺社仏閣など見どころ

● 史跡・名勝など見どころ

■ 石碑など

○ 駅や公共施設

P 駐車場

男女 トイレ

警察署・交番

文 学校・幼稚園・保育園

〒 郵便局

銀行など

よろず買い物

コンビニエンスストア

お食事処

喫茶処

甘味処（お菓子）

茶 お茶屋さん

お酒屋さん

お魚屋さん（湖魚）

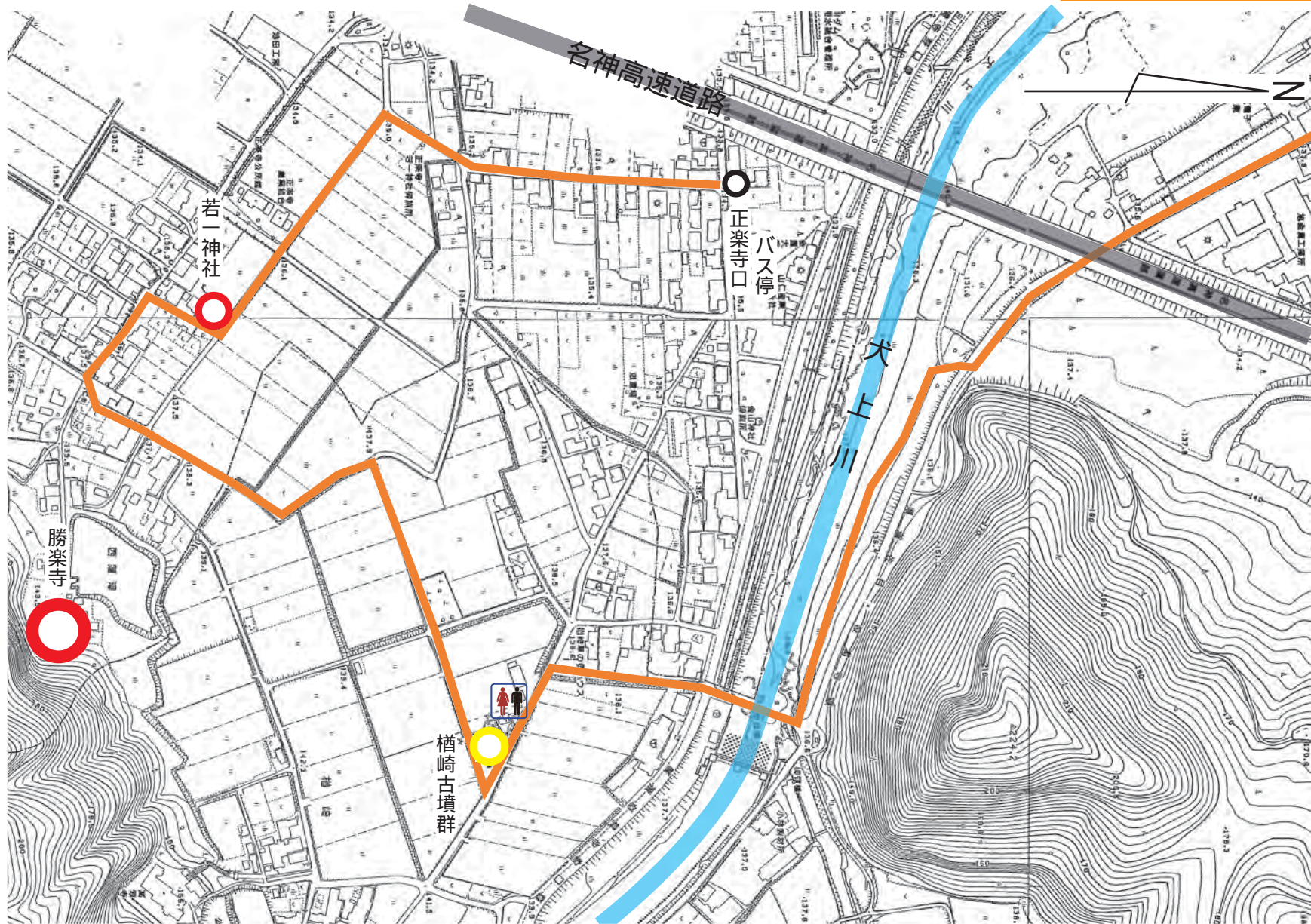
GS ガソリンスタンド

H お宿

半日コースから出発!

この町の文化財を探そう

半日コース



勝楽寺と佐々木道誉

勝楽寺は犬上郡甲良町にある正楽寺山の西麓に位置する寺院です。創建は南北朝期の武将である京極高氏（法名道誉^{どうよ}）によるもので、京都東福寺の雲海正意^{しやうへい}を招聘して開山したと伝えられています。現在は臨済宗の寺院となっています。

京極高氏は近江に本拠地を置く佐々木京極家の第4代目です。最初は鎌倉幕府最後の執権北条高時に仕えていましたが、足利尊氏らとともに後醍醐天皇側へ転じ倒幕に活躍します。建武の新政の崩壊後は足利尊氏に従って北朝方に付き、室町幕府創設に助力し幕府の実力者として要職を勤めました。一時は近江を始め5カ国の守護としても任じられ、佐々木氏の宗家である六角氏を凌駕します。

派手な言動を数多く重ねたことでも有名で、婆娑羅大名とも呼ばれました。また、茶道や華道、連歌などの文化芸術に関心と理解を持ち、能楽や狂言の保護・育成にも努めた秀れた文化人でもありました。

道誉は正楽寺山に城を築き、本拠地を当初の柏原（米原市柏原）から移転させ、応安6年（1373）に亡くなるまでここを本拠とします。この本拠地移転の際に勝楽寺を菩提寺として建立したと伝えられています。その後、勝楽寺には多数の坊が造られ、寺勢は興隆しましたが、織田信長が近江に侵攻した際に、周辺の寺院と同様に焼き討ちに遭い衰えたと伝えられ、江戸時代に彦根藩の援助を得て再興されました。

現在は大日池に隣接する境内に本堂や大日堂、山門といった建物が残るのみとなっています。山門は四脚門^{しきやく}で、室町時代の建築様式を残すものとして甲良町指定文化財となっています。大日堂も甲良町指定文化財です。寺の本尊で秘仏となっている大日如来像は平安時代の秀作で国の重要文化財となっています。寺には



佐々木道誉墓

道誉の肖像画も伝えられています（国の重要文化財、現物は京都国立博物館に寄託）。似絵^{にせえ}と呼ばれる種類の絵画で、僧衣姿で生前に描かれたものです。これは貞治5年（1366）に道誉の三男高次により製作され、道誉自身が賛（画中の詩や文）を書いています。境内には道誉の墓と伝えられる石塔も残されています。火を受け、風化し激しく損傷していますが、元は規模の大きな宝篋印塔であったと思われます。その背後には、初代から三代目までの住職の墓と伝えられている石塔（無縫塔^{むほうとう}、甲良町指定文化財）等も並んでいます。

若一神社

かつては若一大権現と呼ばれ、勝楽寺の境内鎮守でしたが、大正8年（1919）現在地に移されました。境内に建つ宝塔は、延慶4年（1311）、清原という人物によって亡き父の13回忌に建てられたことが銘に刻まれています。神社とともに、大正8年にこの地に移されました。鎌倉時代の様式を伝える石造物の優品として甲良町指定文化財となっています。



若一神社宝塔

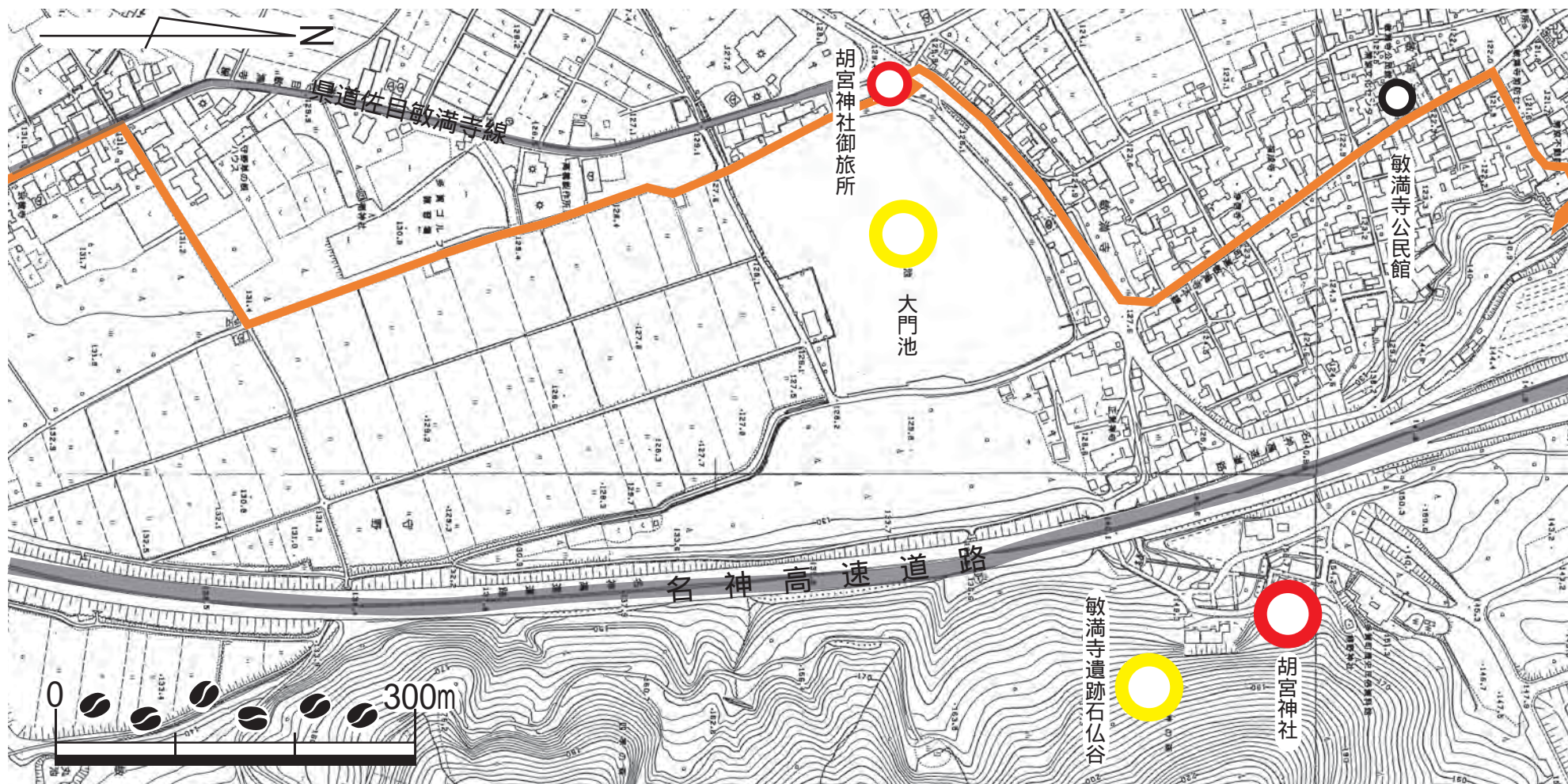
檜崎古墳群

檜崎古墳群は、犬上川左岸扇状地に分布する古墳群です。平成6～11年度のほ場整備事業に伴う発掘調査によって、古墳時代後期の61基の古墳が確認されました。発掘された古墳は、ほとんどが円墳で、その規模は直径4m～20m程度です。石室からは鉄製の武具、工具、馬具などが出土しています。

そのうち、直径20m程度に復元できる1号墳は、この地の開拓に主導的な役割を果たした有力豪族の墓ではないかと考えられています（多賀町指定史跡）。



檜崎1号墳



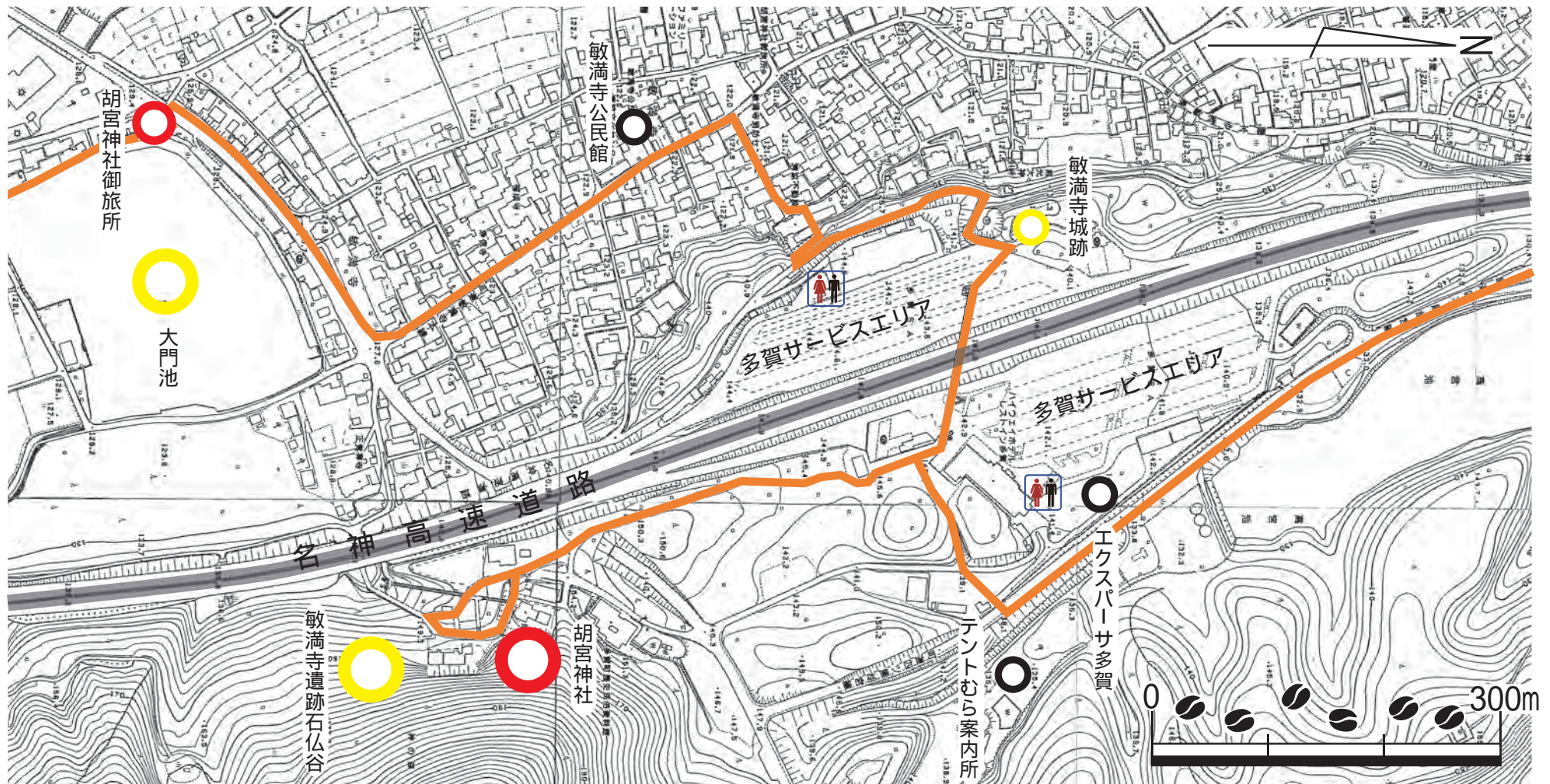
みぬま 水沼荘と大門池

水沼荘は、天平勝宝3年(751)、聖武天皇によって東大寺に^{せにゆう}施入された荘園です。正倉院には東大寺領の荘園絵図が13面残されていますが、その中に水沼荘の絵図も含まれており、水沼荘の位置や景観についての貴重な情報を与えています。それによると水沼荘の範囲は、犬上郡条里の十条一里・十条二里・十一条一里にまたがっており、現在の多賀町敏満寺周辺にあたると思われます。絵図には「水沼村」と記されていますが、中世には敏満寺村と呼ばれるようになったと考えられます。また、絵図に

は水沼荘の東側に水沼池が描かれていますが、これは現在敏満寺集落の南にある大門池にあたると思われます。絵図では荘園との境に水門が描かれていますが、この池が荘内の田地を潤す用水池であったことを物語っています。



大門池と青龍山



びんまんじ 敏満寺遺跡

敏満寺は、現在の名神高速道路多賀サービスエリア周辺に存在した寺院です。平安末から記録に現れ、鎌倉末には巨大な本堂や30棟を超える諸堂が建ち並び大寺院だったようです。また奈良東大寺の再建を進めていたしゅんじょうぼうちようげん俊乗坊重源とも深く関わっており、重源が敏満寺にぶっしゃり仏舎利を寄進したことを記した寄進状が存在します。しかし、戦国時代に入ると永禄5年(1560)浅井長政の攻撃を受けて堂塔が焼失します。さらに元龜3年(1572)、織田

信長の攻撃を受け、寺領を失い、^{このみや}胡宮神社と^{ぶくじゆいん}寺坊の福寿院を残して廃絶したといわれています。

昭和32年(1957)にはじまる名神高速道路の建設に伴って敏満寺遺跡の発掘調査が行われ、以後数度にわたって多賀サービスエリア周辺で発掘調査が行われました。最初に行われた昭和34年(1959)の調査では、現在の高速道路の下から仁王門と推定される建物礎石が見つかったことから、高速道路に沿うように参道が延びていたのではないかと推定されています。

昭和61年の調査では、上り線（名古屋方面）のサービスエリア内から^{やくらだい}櫓台や^{からぼり}空堀、門跡などの城郭関連遺構が発見されました。出土遺物からは16世紀後半という限られた時期に使われた遺構であり、浅井氏あるいは織田氏との戦いの中で防御施設として築かれたものではないかと考えられています。また下り線（京都方面）のサービスエリア内の調査では溝や土塁で区画されたエリアや、地面に甕を埋めた^{うめがめ}埋甕遺構が発見され、町屋あるいは坊跡ではないかといわれています。さらに、サービスエリアの南側、現在胡宮神社が位置する青龍山の山麓に、大量の石仏が並べられた中世墓地（^{いしぼとけだに}石仏谷）があります（国の^{しせき}史跡）。平成9年から行われた調査では、骨を納めた土器や陶磁器（^{ぞうこつき}蔵骨器）が見つかりましたが、これらは12世紀から15世紀にかけてのものがほとんどであり、その中心は13・14世紀のものであります。一方、大量に分布する石仏は15世紀後半から16世紀と見られるものが大半で、蔵骨器の年代観とはズレがあるところが特徴です。

こうした調査成果からうかがえる敏満寺の姿は、南半に寺院部分と墓所があり、北半に坊跡あるいは町屋跡を含む広大な寺域であったと想定できます。また、単に僧侶が宗教活動を行うだけの施設ではなく、僧侶の生活を支える人たちや、そうした多くの人々の生活を^{まかなう}賄う多量の物資が行き交う、都市的な場所としてとらえることもできるのではないのでしょうか。



敏満寺城跡



石仏谷

このみや 胡宮神社と平清盛御落胤伝説

祭神は伊弉那岐命・伊弉那美命。創立年代は不明ですが、元徳3年(1331)成立と考えられる敏満寺の堂塔鎮守目録（胡宮神社文書）に「木宮兩社、拝殿九間」と記されており、中世には敏満寺の鎮守社であったようです。16世紀末、敏満寺は兵火にあって焼失しますが、胡宮神社は塔頭福寿院を別当として存続します。敏満寺滅亡後、寺宝の多くは胡宮神社に移されました。重源が敏満寺に舍利を寄進したときの寄進状や銅製五輪塔（いずれも国の^{じゅういふ}重要文化財）やもそうした寺宝の一つです。また、境内にある庭園が国の^{めいしょう}名勝、本殿が^{しずけ}滋賀県指定文化財です。

ところで、神社に伝わる古文書の中に^{ぶっしゃりそうしやうず}仏舎利相承図（^{たが}多賀町指定文化財）があります。これは、白河上皇の所持していた^{しやり}舎利が、敏満寺に寄進されるまでの流れを記したものです。そこに大変興味深い記述が見られます。舎利は白河上皇から寵愛する^{ぎおんによご}祇園女御へと譲られるのですが、その祇園女御に妹がいたことが記されており、そこに「被召于院懐妊之後、刑部卿忠盛賜之、為忠盛之子息、云清盛、仍不号宮矣」と書かれています。白河院に召され、懐妊の後、平忠盛に与えられ、生まれた子は忠盛の子として清盛と名付けられたというのです。平清盛については白河上皇の^{ごらくいん}御落胤であるという説があり、清盛の異例ともいえる出世の早さはまさにそうしたことによるのではないかとされています。真偽のほどは定かではありませんが、このような重要な史料が胡宮神社に伝わったことは注目してよいでしょう。



胡宮神社庭園



多賀大社

和銅5年(712)編纂の『古事記』に「伊邪那岐大神は淡海の多賀に坐すなり」とあり、この頃には畿内一円に知れわたっていたとみられます。元々は多賀一帯の犬上郡を支配していた豪族犬上君(犬上氏)の祖神を祀っていたと思われます。犬上氏は第5次遣隋使・第1次遣唐使で知られる犬上御田いぬかみのみたすき鎌を輩出している名族です。

平安時代、延長5年(927)に編纂された『延喜式神名帳』に「多何神社二座」とあり、この時代には伊邪那岐命・伊邪那美命2柱が祀られていたことが分かります。

室町時代、明応3年(1494)には神仏習合が盛んとなり、神宮寺として不動院が建立され、



駅前の大鳥居



道標1



道標2



多賀大社前の街並み

神宮寺配下の坊人が全国にお札を配って宣伝し始めます。その時に「お伊勢参らばお多賀へ参れ、お伊勢お多賀の子でござる」「お伊勢七度、熊野へ三度、お多賀さまへは月参り」と謡い歩いたということです。多賀大社の御祭神は伊邪那岐命・伊邪那美命ですので、伊勢神宮の祭神天照大神はその子にあたるわけです。

中世以降、多賀大社の信仰圏は全国に拡がり、庶民だけでなく武士にも広く浸透してい

たことは、京極道誉や佐々木六角氏による社領寄進や安堵の文書が伝わっていたことでわかります。また甲斐の武田信玄の厄除け祈願文や、織田信長の社領安堵状、豊臣秀吉が母大政所の病氣平癒を祈願した祈願文も伝わっており、多賀大社文書は**滋賀県指定文化財**となっています。また、紙ほんこんじゃくしやくちょうば・きゅうばずごりや本地著色調馬・厩馬図が国の**重要文化財**に、奥書院庭園が国の**名勝**に、紙ほんちやくしやくさんじゅうろつかせんえびょうぶ本著色三十六歌仙絵屏風・社頭古絵図・梵鐘・奥書院が**滋賀県指定文化**



多賀大社



そり橋

財となっている他、そり橋をはじめとする多くの建物が**多賀町指定文化財**です。

多賀大社をめくっては数々の伝説があり、それが神社の御利益とも関わっています。たとえば御利益の一つである長寿延命については次のような話があります。鎌倉時代に東大寺を再建した俊乗坊重源が、着工にあたり成就祈願のため伊勢神宮に17日間の参籠を行ったところ夢に天照大神が現れ「事業を成功させるために寿命を延ばしたいなら多賀神に祈願せよ」と告げられました。重源が多賀社に参ると目の前に1枚の柏の葉が舞い落ちてきました。よく見るとその葉には「蕙」の字の形に虫食いの痕があるではありませんか。「蕙」は「廿」と「延」、廿年は寿命が延びると喜び見事東大寺を再建させたというわけです。重源は多賀社にお礼参りをしますが、境内の石に座り込み眠るように亡くなったと伝えられています。その石は「寿命石」として境内にあります。

また、多賀大社のお守りとしては多賀杓子が有名ですが、これについても次の様な話があります。元正天皇の養老年中(717～724)帝の病氣平癒を祈念して神官らが強飯こわめしを炊き、「しで」の木で作った杓子を添えて献上し



多賀大社万灯会



多賀大社前の街並み(多賀大社万灯会の夜)

たところ、帝の病が全快し靈驗あらたかな無病長寿の縁起物となったといわれています。

この頃は現在のようなアルファ米と違ってパラパラの硬いご飯（おこわより硬かったという）ですので、杓子もお玉の部分が大きく窪み、柄も彎曲していたということです。（安芸の宮島の杓文字より多賀の方が古い）このお多賀杓子が「お玉杓子」になり蛙の子の「おたまじゃくし」の語源になったともいわれています。

そして、多賀のお土産といえば糸切り餅です。長く延ばした餅の表面に赤青3本の線で蒙古の旗印を模し、弓の弦に見立てた糸でこれを切ります。元寇の戦勝に謝し奉納したことに由来するということです。

奥書院庭園の拝観拝観料：300円（春秋特別公開時500円）

電話：0749-48-1101



多賀大社本殿



多賀大社太閤蔵

村山たか

村山たかは幕末の彦根藩主井伊直弼とその腹心であった長野主膳に仕えた女性です。井伊直弼が行った安政の大獄に主膳とともに暗躍したとして、直弼が桜田門外の変に斃れた後、土佐・長州藩士らに捕らえられて京都三条大橋のたもとに三日三晩生き晒しの刑に処されます。その後京都円光寺で剃髪して尼となり、明治9年(1876)に亡くなりました。たかの出自については、はっきりとは分かりませんが、多賀大社社僧の娘であったといわれています。また多賀大社門前にある「不二家」は、たかが幼少の頃、養女として暮らしていた家とされています。



村山たか住居

真如寺

天正年間創建とされる浄土宗寺院です。本尊の木造阿弥陀如来坐像（国の重要文化財）は、元は多賀大社の本地仏でしたが、明治の神仏分離によって、真如堂に移されたものです。僧行基が諸国巡礼の時、自らの手で彫り多賀大社に納めたものといわれています。

拝観料 200円

電話：0749-48-0507



真如寺